2025年度　入学試験問題

国　語

（第１回）

［注意］

1．試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

2．解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、
　解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入し、QRコードシールをはりなさい。

3．解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

4．問題冊子の余白等は自由に使って構いません。

5．試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学付属中学校

【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

1　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「最近の大学生はバカになったのでしょうか？」とよく訊ねられる。

答えるのに困る質問である。

ある意味では「イエス」である。たしかに学力は低下している。「壮絶なまでに」と申し上げてもよいくらいだ。だが、①それを学生の責に帰すことに私は一抹の疚しさを感じるからである。

三年ほど前、学生のレポートに「精心」という字を見出したときには強い衝撃を受けた。だが、この文字はまだ「精神」という語の「誤字」であるということがただちに分かる程度の誤記であった。去年、学生のレポートに「無純」の文字を見出したときには、さすがに、しばらく動悸が鎮まらなかった。②それが「精心」とは違う意味での、知的な「地殻変動」の兆候のように思えたからである。

文脈をたどる限り、「無純」の語をこの学生はただしく「矛盾」の意味で用いていた。「むじゅん」ということばの意味をこの学生は理解しているのである。「無純」という文字も、「（対立者を含んでいるので）純粋では無い」という解釈によるのであろうから、決してデタラメとは言えない。むしろ、「むじゅん」という音と、文脈から、「無純」という「当て字」を推理した知的能力は「かなり高い」と申し上げてもよいくらいだ。

だから問題はむしろ、③語義を理解し造語する能力まで備えた学生が、なお「矛盾」という文字を知らなかった、という点に存するのである。

もちろん、これまでも「矛盾」という字を書けなかった学生はいくらもいた。「予盾」と書いたり、「矛循」と書いたりする例は珍しいものではない。けれども、これらの誤字は「矛盾」という文字のかたちを「正確には再現できない」というだけのことであり、その文字を「知らない」ということとは違う。

現に私たちは毎日のように、「正確には再現できないが、読むことはできる」文字を使ってコミュニケーションをしている。「顰蹙を買う」ということばは日常的に使われているが、「ひんしゅく」を正しく漢字で書ける人はあまりいない（私は書けない）。「語彙」の「い」の字や「範疇」の「ちゅう」の字を「どう書くの？」といきなり訊かれたら困る人は少なくないだろう。

だが、「無純」が暗示するのは、そういう種類の「知識の不正確さ」とは別の種類の「知識の欠落」が蔓延しつつあるという現実である。

なぜ、「矛盾」が書けないのか？

「本や新聞を読まないからだよ」と言って済ませる人がいる。

だが、そうだろうか。実際には、彼らはけっこう文字を読んでいる。

彼らが愛読する「マンガ」というのは絵と文字のハイブリッド・メディアであり、膨大な量の

文字情報をも同時に発信している(だから識字率の低い国では、子どもたちが「マンガさえ読めない」ということが起こるのだ)。それに、彼らが日頃耽読している情報誌やファッション誌もまた少なからぬ文字情報を含んでいる。

なぜ、これだけ文字に浸っていながら、「文字が読めない」ということが起こるのか。

私の仮説は次のようなものである。

それは彼らが「飛ばし読み」という習慣を内在化させているからである。

今の若者たちのリテラシーには、「分からない文字は瞬時に飛ばして、読めなくても、気にしない」という「物忘れ機能」が初期設定でビルトインされている。これが問題の根幹なのである。

通常、④私たちは「自分程度の知的水準の読者を対象としている」と想定されているメディアで、自分の「読めない文字」や「意味の分からない単語」に出会った場合、「ぎくり」とする。文脈から推察できない場合は、人に聞いたり、(あとでこっそり)辞書を引いたりして、語義を確定しようとする。そのような「意味の欠如」に反応する不快や欠落感に担保されて私たちの語彙は拡大するのである。

ところが、当今の若者たちの場合は、「自分たちの知的水準に合った」メディアに日常的に触れながら、「意味の欠如」を埋めようとする意欲がほとんど発生しない。読めない文字があっても気にならないのである。

どうして、そんなことが起こるのか?

実物に即してご説明しよう。⑤次の文章は関西のある情報誌の音楽情報コラムの冒頭の一節である。

「一一月だ。イアン・シンクレアの最新作『ロンドン・オービタル』の出版に合わせて、ロンドンの『バービカン』で一風変わったイヴェントが催される。グランタから出版されるこの本はM25—この作者が首都を取り囲むフェンスであると見なす幹線道路—に捧げられたものだ。このイヴェントではワイアー(〝アヴァン・ウェイブ/ポスト・ギャルド・パンクス〟彼らを覚えているかな?)、思い思いに装ったKLF(覚えている?)、ビル・ドラモンド(一〇〇万ポンドを燃やした男!)起き掛けにたっぷりスコッチを呑むことで有名なSF作家J・G・バラード、そして最近ではピジン英語を世界的な言語として広めるプロジェクトと腹話術ワークショップで知られる紳士、ケン・キャンベルといった突飛なキャストが集められている。」(Paul Bradshaw, London Calling,『Meets, Regional』、二〇〇三年一月号)

私がこのパラグラフの中で意味の分かった固有名詞は「ロンドン」と「J・G・バラード」だけであった。

いまどきの若者たちがどれほどワールド・ミュージック・シーンについて深い造詣を誇っているのか、私には想像もできないが、このパラグラフを「すらすらと」読んで、その意味のすべてを理解できたのは『ミーツ・リージョナル』の読者の中にも決して多くはなかったであろう。

この引用はやや特殊すぎるけれど、それでも、このような文章ばかりを浴びるように読み続け

た場合に、人間は文字情報に対してどのような反応をするようになるのか、ということは容易に想像がつく。

そう。「意味の分からないことばがあっても、気にしない」という反応である。

「覚えてるかい？」というポール・ブラッドショウの親しげな呼びかけが暗示しているように、この文章が読者に求めているのは、ちょうど英語のヒットソングを（歌詞の意味が分からなくても）愉しめるのと同じように、「ノリのよい文章を読んで、気分がよくなること」である。

「単語一つ一つの意味なんか、どうだっていいじゃないか。」

書き手だってそう思って書いているのだ。

書く側、読む側に共有されているこのような⑥「テクスト＝音楽」的な受容態度が、「今どきの若者のリテラシーに初期設定として⑦ビルトインされている『飛ばし読み』機能」を形成する心理的土壌をなしていると私は考えている。

同じことは英語まじりのＤＪ番組や、スタッフのあいだでしか通じない意味不明の「内輪ギャグ」を平然と放送するヴァラエティ番組についても言えるだろう。いわば、メディアはほとんど意図的に「虫食い算」のようなかたちで情報を供与しているのである。そして、メッセージの受け手がその「意味の虫食い部分」について、「え、いま何て言ったの？」「え、それ何？何のこと？」というふうに逐語的に反応するのは「みっともないこと」だとされているのである。

いまの若い人たちが目にし、耳にする日本語の文章は、あまりに多くの「意味不明のことば」を含んでいる。そして、読者視聴者に期待されているのは、その逐語的理解ではなく、文章の持つグルーヴ感やテンションに同調して「乗る」ことだけなのである。

おそらくはそのようにして「無純」と書く大学生は誕生したのであると私は思う。

彼女は「矛盾」という文字を新聞や雑誌や小説で読むときは、それを無意味な「⑧汚れ」として「読み飛ばし」、「むじゅん」という音の語義については、文脈と「ノリ」から推理してみせたのである。

先日、入試の英文和訳の採点をした。「すごい」答案が続出して、何度も赤鉛筆をはらりと落とした。その答案を見て私が慄然としたのは、彼女たちが「英語が出来ない」からではない。「日本語が出来ない」からでもない（もはや、そういうレベルの問題ではない）。

まったく無意味な文章が平然と書き連ねてあったからである。

彼女たちは、誰が読んでも意味不明である文章を書いて、そしてそのことにご自身が心理的抵抗をあまり感じていないのである。とすれば、⑨この事態を説明できるロジックは一つしかない。それは世界は「現に彼女たちが今書いているようなテクスト」として読まれているということである。おそらく「世界」は、彼女たちの書く答案に似た「意味の虫食い状態」として彼女たちの意識の前に現前しているのである。

情報や知識の欠如が「欠如」として前景化せず、むしろ世界の「地」として背景に溶け込んでいる状態、「意味の欠如」が不快や不足として感知されない状態、そのような知的状況に二一世

紀の日本の若者は置かれている。

そして、彼らをこのような知的窮状に追い込んだ責任は、年長者たちの世代全体（教育者もメディア業界人も知識人たちも含めて）にあると私は思う。逐語的に読んでも明晰判明であり、それが世界にぴんと筋の通った整序をもたらすようなことばで書き語るという努力を私たちはあまりに長きにわたって怠ってきたのではあるまいか。学生たちの語彙の不足を責めるより先に、私たちはまず自分たちの「ことば」の点検から開始すべきではあるまいか。

（内田樹※「『矛盾』と書けない大学生」）

※「『矛盾』と書けない大学生」……初出は二〇〇三年。当時筆者は女子大学に勤務していた。

問1　――線①「それを学生の責に帰すことに私は一抹の疚しさを感じる」とありますが、では誰のせいだと述べていますか。文中から十字でぬき出しなさい。

問2　――線②「それが『精心』とは違う意味での、知的な『地殻変動』の兆候のように思えた」とありますが、これを説明した次の文の空らん（　A　）・（　B　）にあてはまることばを文中から探し、それぞれ指定字数でぬき出して答えなさい。

筆者は、学生の誤字は（　A　七字　）によるものと考えていたが、もはや（　B　二十四字　）になっていることに気付いた。

問3　――線③「語義を理解し造語する能力」とは、どのような能力ですか。文中の具体例を用いて、「能力。」に続くように、三十字以内で説明しなさい。

（下書きらん）

10　20　30

能力。

問4　――線④「私たちは～『ぎくり』とする」とありますが、この内容の具体例として**ふさわしくないもの**を次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　中学校の将棋部員が新聞に掲載されている将棋の記事を読んだが、分からない記号があって冷や汗をかく。

2　高校生の兄が使っている国語の教科書を小学生の弟が読んでみたが、内容が分からずショックを受ける。

3　大学生が自分の専門の研究論文を読んだが、専門用語の意味がまったく分からず恥ずかしく思う。

4　女子高生が中高生をターゲットとしているファッション誌を読んだが、出てくるファッション用語が分からず焦る。

問5　――線⑤「次の文章」とありますが、これは何を明らかにするために用いた具体例ですか。「最近の若者たちは～ということを明らかにするための具体例」となるように「～」の部分を二十二字でぬき出し、はじめと終わりの三字で答えなさい。

問6　――線⑥「『テクスト＝音楽』的な受容態度」とはどのような受容態度のことですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　文章を読んだ時に雰囲気で気分が良くなりさえすれば、単語一つ一つの意味が分からなくても構わないという受容態度。

2　今の若者が日頃ノリで音楽を聴くように、まったく意味を考えたり頭を働かせたりしないで文章に接していく受容態度。

3　単語が分からない文章でも雰囲気で理解できれば良いように、意味不明の英語の歌でも雰囲気さえ分かれば良いという受容態度。

4　内輪ギャグを垂れ流しにする放送を初めて聞いたとしても、よく分からない部分を上手に類推できるようにしていく受容態度。

問7　――線⑦「ビルトイン」とありますが、ここでの「ビルトイン」を言い換えた部分を文中から探し、三字でぬき出しなさい。

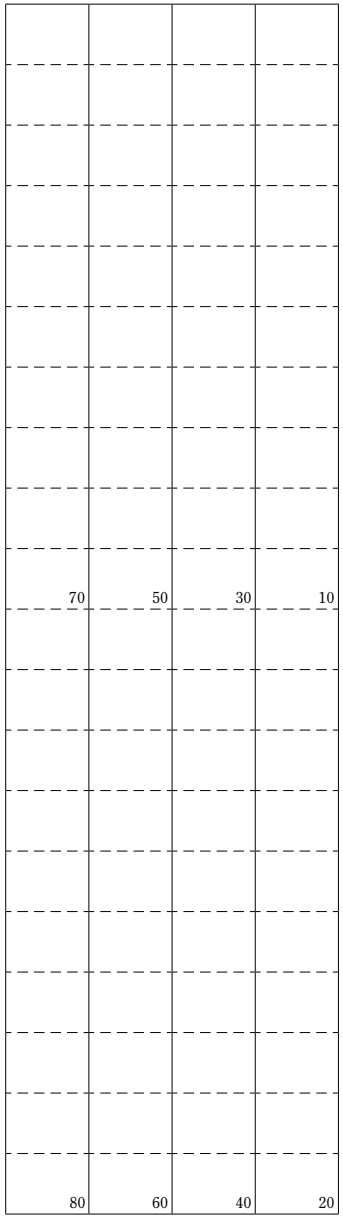
問8　――線⑧「汚れ」とは何を意味していますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　若者のリテラシー　　2　意味の虫食い部分

3　文章の持つグルーヴ感　　4　突飛なキャスト

問9　――線⑨「この事態を説明できるロジックは一つしかない」とはどういうことですか。文中のことばを使って「～という事態は～と説明するしかないということ。」という形で八十字以内で答えなさい。

（下書きらん）



2　次の文章は短編小説のほぼ全文（中略あり）である。読んで後の問いに答えなさい。

喜美子は洋裁学院の教師に似合わず、①年中ボロ服同然のもっさりした服を、平気で身につけていた。自分でも吹きだしたいくらいブクブクと肥った彼女が、まるで袋のようなそんな不細工な服をかぶっているのを見て、洋裁学院の生徒たちは「達磨さん」と称んでいた。

しかし、喜美子はそんな綽名をべつだん悲しみもせず、いかにも達磨さんめいたくりくりした眼で、ケラケラと笑っていた。

「達磨は面壁九年やけど、私は三年の辛抱で済むのや。」

三年経てば、妹の道子は東京の女子専門学校を卒業する、乾いた雑布を絞るような学資の仕送りの苦しさも、三年の辛抱で済むのだと、喜美子は自分に言いきかせるのであった。

両親をはやく失って、ほかに身寄りもなく、姉妹二人切りの淋しい暮らしだった。姉の喜美子はどちらかといえば醜い器量に生まれ、妹の道子は生まれつき美しかった。妹の道子が女学校を卒業すると、喜美子は、「姉ちゃん、私ちょっとも女専みたいな上の学校、行きたいことあれへん。私かて働くわ。」という道子を無理矢理東京の女子専門学校の寄宿舎へ入れ、そして自分は生国魂神社の近くにあった家を畳んで、北畠のみすぼらしいアパートへ移り、洋裁学院の先生になったその日から、もう自分の若さも青春も忘れた顔であった。

妹の学資は随分の額だのに、洋裁学院でくれる給料はお話にならぬくらい尠く、夜間部の授業を受け持ってみても追っつかなかった。朝、昼、晩の三部教授の受持の時間をすっかり済ませて、古雑巾のようにみすぼらしいアパートに戻って来ると、喜美子は古綿を千切って捨てたようにくたくたに疲れていたが、それでも夜更くまで洋裁の仕立の賃仕事をした。月に三度の公休日にも映画ひとつ見ようとせず、お茶ひとつ飲みにも行かず、切り詰め切り詰めた一人暮らしの中で、せっせと内職のミシンを踏み、急ぎの仕立の時には徹夜した。徹夜の朝には、誰よりも早く出勤した。

そして、自分はみすぼらしい服装に甘んじながら、妹の卒業の日をまるで泳ぎつくように待っているうちに、さすがに無理がたたったのか、喜美子は水の引くようにみるみる痩せて行った。

「こんな痩せた達磨さんテあれへんわ。」

鏡を見て喜美子はひとり笑ったが、しかし、やがてそんな冗談も言っておれぬくらい、だんだんに衰弱して行った。

道子がやっと女専を卒業して、大阪の喜美子のもとへ帰って来たのは、やがてアパートの中庭に桜の花が咲こうとする頃であった。

「お姉さま、只今、お会いしたかったわ。」

三年の間に道子はすっかり東京言葉になっていた。喜美子はうれしさに胸が温まって、暫らく口も利けず、じっと妹の顔を見つめていたが、やがて、いきなり妹の手を卒業免状と一緒に強く握りしめた、その姉の手の熱さに、道子はどきんとした。

「あら、お姉さまの手、とっても熱い。熱があるみたい……」
言いながら道子は、びっくりしたように姉の顔を覗きこんで、
「……それに、随分お痩せになったわね。」
「ううん、なんでもあれへん。痩せた方が道ちゃんに似て来て、ええやないの。」
喜美子はそう言って淋しく笑ったが、しかし、その晩喜美子は三十九度以上の熱をだした。道子は制服のまま氷を割ったり、タオルを絞りかえたりした。朝、医者が来た。肋膜を侵されているということだった。
医者が帰ったあとで、道子は薬を貰いに行った。粉薬と水薬をくれたが、随分はやらぬ医者らしく、粉薬など粉がコチコチに乾いて、ベッタリと袋にへばりつき、何年も薬局の抽出の中に押しこんであった A のをそのまま取り出して、呉れたような気がして、なにか頼りなかったが、しかし道子は姉がそれを服む時間が来ると、「どうぞ効いてくれますように。」と、ひそかに祈った。しかし姉の熱は下らなかった。
桜の花が中庭に咲き、そして散り、やがていやな梅雨が来ると、喜美子の病気はますますいけなくなった。梅雨があけると生国魂神社の夏祭が来る、丁度その宵宮の日であった。喜美子が教えていた戦死者の未亡人達が、やがて卒業して共同経営の勲洋裁店を開くのだと言って、そのお礼かたがた見舞いに来た。
道子がそのひと達を玄関まで見送って、部屋へ戻って来ると、壁の額の中にはいっている道子の卒業免状を力 B のない眼で見上げていた喜美子が急に、蚊細いしわがれた声で、「②道ちゃん、生国魂さんの獅子舞の囃子がきこえてるわ。」
と、言った。道子はふっと窓の外に耳を傾けた。しかしこのアパートから随分遠くはなれた生国魂神社の境内の獅子舞の稽古の音が聴えて来る筈もない。
窓に西日が当たっているのに気がついたので、道子は立ってカーテンを引いた。そしてふと振りむくと、喜美子は「ああ。」とかすかに言って、そのまま息絶えていた。

〈中略部内容〉

姉、喜美子の死後、数日何も手につかなかった妹の道子は新聞記事の中に南方派遣の日本語教師募集の案内をふとした折に見出し、姉が命にかえてまで自分に与えてくれた卒業免状を生かすべき道はこれであると応募し、合格。以下の文は、合格の通知が届いたところからのものである。

合格の通知が郵便で配達されたのは、三日のちの朝であった。ところが、その通知と一緒に、田中喜美子様と、亡き姉に宛てた手紙が、ひょっこり配達されていた。アパートの中庭では、もう X の花が匂っていた。
死んでしまった姉に思いがけなく手紙が舞い込んで来るなど、まるで嘘のような気がした。姉

が死んだのは、忘れもしない生国魂神社の宵宮の暑い日であったが、もう［X］の匂うこんな季節になったのかと、姉の死がまた熱く胸にきて、道子は涙を新たにした。

やがて涙を拭いて、封筒の裏を見ると、佐藤正助とある。思いがけず男の人からの手紙であった。道子は何か胸が騒いだ。

道子が姉のもとへ帰ってから、もう半年以上にもなるが、ついぞこれ迄男の人から姉の所へ見舞いの手紙も、またくやみの手紙も来たことはなく、それが姉のさびしく清潔な生涯を悲しく裏書しているようで、道子はふっとせつなかったが、しかし姉が死んで三月も経った今、手紙を寄越して来たこの佐藤正助という人は一体誰だろうと、③好奇心が起こるというより、むしろ淋しかった。

随分永らく御無沙汰して申訳ありません。僕も愈よ来年は大学を卒業するというところまで漕ぎつけましたが、それに先立って、学徒海鷲を志願し、近く学窓を飛び立つことになりました。永い間苦学生としての生活を送って来た僕には、［Y］待たれた卒業でしたが、しかしいま学徒海鷲として飛び立つ喜びは、卒業以上の喜びです。恐らく生きて帰れないでしょう。従ってあなたにもお眼に掛れぬと思います。いつぞやあなたにお貸した④鷗外の「即興詩人」の書物は、僕のかたみとして受け取って下さい。永い間住所も知らせず、手紙も差し上げず、怒っていらっしゃることと思いますが、そのお詫びかたがたお便りしました。僕は今でも、あなたが苦学生の僕の洋服のほころびを縫って下すった御親切を忘れておりません。御自愛祈ります。

その文面だけでは、姉の喜美子とその大学生がどんな交際をしていたのか、道子には判らなかったが、しかし、読み終わって姉の机の抽出の中を探すと果たして鷗外の「即興詩人」の文庫本が出て来た。

「お姉さまはなぜこの御本を返さなかったのだろう？」

と呟いた咄嗟に、あ、そうだわと、道子は思い当たった。当時大阪の高等学校の生徒であったその青年は、高等学校を卒業して東京の大学へ行ってしまうと、もうそれきり手紙も寄越さず、居所も知らさなかったのではなかろうか。それ故返そうにも返せなかったのだ。

たぶん二人の仲は、その生徒よりも三つか四つ歳上の姉が、苦学生だというその境遇に同情して、洋服のほころびを縫ってやったり、靴下の穴にツギを当ててやったりしただけの淡いもので、離れてしまえばそれ切り、居所を知らせる義務もないような、なんでもない仲であったのかも知れないと、道子は想像した。

「けれど、お姉さまが待っていらしったのは、やはりこの人の便りだったのだわ。」

道子はそう呟き、机の抽出の中に大切につつましくしまわれていた「即興詩人」の中に、⑤ひそかな姉の青春が秘められていたように思われて、ふっと温い風を送られたような気がした。

「でも、待っていた便りが、死んでしまってから来るなんて、そんな、そんな……。」
そう思うと、道子はまた姉が可哀想だった。姉の青春のさびしさがこんなことにも哀しく現れていると、ポトポト涙を落としながら、道子はペンを取って返事をしたためた。

妹でございます。姉喜美子ことは、ことしの七月八日、永遠にかえらぬ旅に旅立ってしまいました。永い間ご本をお借りして、ありがとうございました。……

そこまで書いて、道子はもうあとが続けられなかった。しかし、ただ悲しくなって、筆を止めたのではなかった。
学徒海鷲として雄雄しく飛び立とうとするその人に、こんな悲しい手紙を出してはいけないと思ったのだ。これまで姉に手紙を寄越さなかったのは、おそらく学生らしいノンキなヅボラさであったかも知れず、そして今、再び生きて帰るまいと決心したその日に、やはり姉のことを想いだして便りをくれたその気持を想えば、姉の死はあくまでかくして置きたかった。
道子は書きかけた手紙を破ると、改めて姉の名で激励の手紙を書いて、送った。
南方派遣日本語教授要員の錬成をうけるために、道子が上京したのは、それから一週間のちのことであった。早朝大阪を発ち、東京駅に着いたのは、もう黄昏刻であった。
都電に乗ろうとして、姉の遺骨を入れた鞄を下げたまま駅前の広場を横切ろうとすると、学生が一団となって、校歌を合唱していた。
道子はふと佇んで、それを見ていた。校歌が済むと、三拍子の拍手が始まった。
「ハクシュ！　ハクシュ！」
という、いかにも学生らしい掛け声に微笑んでいると、誰かがいきなり、
「佐藤正助君、万歳！」
と、叫んだ。
「元気で行って来いよ。佐藤正助、頑張れ！」
きいたことのある名だと思った咄嗟に、道子はどきんとした。
「あ、佐藤さん！」
一週間前姉に手紙をくれたその人ではないか。もはや事情は明瞭だった。学徒海鷲を志願して航空隊へ入隊しようとするその人を見送る学友たちの一団ではないか。
道子はわくわくして、人ごみのうしろから、背伸びをして覗いてみた。円形の陣の真中に、一人照れた顔で、固い姿勢のまま突っ立っている　C　のが、その人であろう。
思わず駈け寄って、
「妹でございます。」
と、道子は名乗りたかった。けれど、
「いや、神聖な男の方の世界の門出を汚してはならない！」

という想いが、いきなり道子の足をすくった、道子は思い止(とどま)った。そして、
「どうせ私も南方へ行くのだわ。そしたら、どこかでひょっこりあの人に会えるかも知れない。その時こそ、妹でございます。田中喜美子の妹でございますと、名乗ろう。」
ひそかに呟(つぶや)きながら、拍子の音が黄昏の中に消えて行く D のを聴いていた。
一刻ごとに暗さの増して行くのがわかる晩秋の黄昏だった。
やがて、その人が駅の改札口をはいって行くその広い肩幅(かたはば)をひそかに見送って、再びその広場へ戻って来ると、あたりはもうすっかり暗く、するすると夜が落ちていた。
「お姉さま。道子はお姉さまに代わって、お見送りしましたわよ。」
道子はそう呟くと、⑥姉の遺骨のはいった鞄(かばん)を左手に持ちかえて、そっと眼を拭き、そして、錬成場にあてられた赤坂青山町のお寺へ急ぐために、都電の停留所の方へ歩いて行った。

（織田作之助「旅への誘い」より）

問1　空らん X にあてはまることばとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　向日葵(ひまわり)　2　梅　3　木犀(もくせい)　4　藤

問2　空らん Y にあてはまることばを本文中より七字でぬき出しなさい。

問3　――線A～D「の」のうち、意味・用法の異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

問4　――線ア「裏書している」、イ「御自愛祈ります」の文中での意味として最もふさわしいものを次から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

ア「裏書している」

1　事実であることを他の面から証明する　2　事実とは別の側面を持っている
3　事実をやんわりぼかして示している　4　事実をことさらに追求している

イ「御自愛祈ります」

1　心よりあなたに感謝しております　2　心からあなたを愛しております
3　また会えるよう祈っております　4　お身体を大切にしてください

問5　――線①「年中ボロ服同然のもっさりした服を、平気で身につけていた」理由として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　あえて愛嬌のある達磨さんのような不細工な格好をして生徒たちに慕われるため。
2　元来、一般的に若い女性が意識するお洒落などには一切興味がなかったため。
3　妹への学資の仕送りの苦しさを生徒たちにも理解してもらうようにするため。
4　自分自身のために時間やお金を使うことはないと自身の心に強く誓っていたため。

問6　――線②「道ちゃん、生国魂さんの獅子舞の囃子がきこえてるわ。」とありますが、喜美子がそのように言ったのはなぜですか。その説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　喜美子は生死の境で、現実と夢との境が曖昧になり、かつて妹と暮らしていた頃はるばる出かけた生国魂神社のお祭りの楽しい思い出を夢として見ているから。
2　妹と二人で暮らしていた頃の懐かしい思い出の象徴である生国魂神社のお祭りの囃子が、生死の境にある喜美子には、聞こえたように感じているから。
3　陽気で朗らかな性格である喜美子は生国魂神社のお祭りが大好きであり、他の人には囃子が聞こえていなくても喜美子自身の中では実際に聞こえているから。
4　妹の専門学校の卒業免状をまじまじと見ていた喜美子は、妹が好きだった生国魂神社のお祭りを思いだして思わず囃子が聞こえたように感じているから。

問7　――線③「好奇心が起こるというより、むしろ淋しかった」とありますが、この時の道子の気持ちを説明したものとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　手紙をくれた男の人がどのような人なのか気にはなるが、姉が亡くなるまでなぜその男の人が妹である私にあいさつすらしに来てくれなかったのだろうかと思っている。
2　手紙をくれた男の人と姉の交際がどのようなものであったか気にはなるが、姉が亡くなったことを知ったらその男の人がどんなに悲しむだろうかと思っている。
3　手紙をくれた男の人がどのような人なのか気にはなるが、せめて姉が亡くなる前に手紙を送ってくれていれば姉の心も満たされたものになっていただろうにと思っている。
4　手紙をくれた男の人と姉の交際がどのようなものであったか気にはなるが、姉が亡くなったことを知りながらもなぜ今まで連絡をくれなかったのだろうかと思っている。

問8　――線④「鷗外」とありますが、森鷗外の作品を次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　吾輩は猫である　2　蜘蛛の糸　3　走れメロス　4　高瀬舟

問9　――線⑤「ひそかな姉の青春」とありますが、道子が想像した「姉の青春」は具体的にどのようなものですか。その説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　青年と言葉を交わしたのは一回きりであろうが、姉にとってその思い出は恋人と過ごしたようなもので、密やかに大切にしたいと考えていたのではというもの。

2　青年と交際を重ねた訳ではなかろうが、日常的な交流はあり、会えなくなってからも姉の心の内では青年のことを気にかけ続けていたのではというもの。

3　青年との出会いを姉は大切な思い出として考えていたであろうが、青年の方は自分のことなど忘れているかもと、心の底で不安にかられていたのではというもの。

4　青年のことを姉は弟のように考えていたであろうが、次第に青年に対して淡い恋心を抱くようになり、いつか思いを打ち明けようと考えていたのではというもの。

問10　――線⑥「姉の遺骨のはいった鞄を左手に持ちかえて、そっと眼を拭き」とありますが、この時の道子の気持ちの説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　姉は青年からの手紙を受け取ることも再会することもできなかったという無念さを思う一方で、姉の遺骨と共に青年の出征を見送ることができて区切りがついた。

2　姉はついぞ青年と再会することができなかったという虚しさを感じる一方で、自分は姉に代わっていつか南方のどこかで青年と出会えるのではないかと期待している。

3　自分はいつの日か南方のどこかで青年と巡り会うこともあるだろうと期待する一方で、姉は青年ともはや再び会うことはないのだと無念に思っている。

4　自分は青年の出征を偶然にも見送ることが出来たと安堵する一方で、姉がついぞ青年に会えず手紙も手にすることなく亡くなったことを残念に思っている。

（問題は次のページに続きます）

3　次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。

犬を呉れる　　西條八十

犬を呉れてやった
六年も飼った愛犬を、
気があらくて　噛みつくので、
近所から抗議が多いので。

かれは小さく黒い自動車に乗り
千葉の農家へ行った、
そこで、月夜に吼えて
河魚の盗まれるのを衛るのだ。

さみしいものか、
いずれおれも近く
この愛する大地と別れるのだ、
こころよい風と光と、やさしい眼ざしと声々と。

いつまでも柔かい蠟のような心に
ぴしりと鍛錬の鞭をくれてやる、
そのひびきの中に
犬も行ってしまった。

（『西條八十詩集』より）

問1　この詩に**使われていない**表現技法を次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　体言止め　　2　隠喩　　3　直喩　　4　対句

問2　この詩の中にはことばが省略されている一行があります。どこにどんなことばを入れると意味がはっきりしますか。ことばが省略されている行のはじめの三字をぬき出し、省略されていることばを他の部分から五字でぬき出しなさい。

問3　――線「いつまでも……くれてやる」から読み取れる思いを説明したものとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　新しい家にもらわれていく愛犬に対して、別れを乗りこえてたくましく生きていってほしいと願っている。

2　飼っていた時はわずらわしいこともあったが、いざ別れてみるとさみしさを感じる自分をいましめている。

3　犬を手放すのはさみしいことであるが、人生に別れはつきものだと自分に言い聞かせるようにたえている。

4　自分も先が長くないと感じるにつけ、この犬と二度と会うことはないだろうというさみしさを感じている。

問4　この詩について説明したものとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　六年間飼いつづけた犬に対する思いが次第（しだい）に変化していくようすを、まっすぐな表現でえがいている。

2　犬との生活や別れをとおして、思い通りにならない人生に対するあきらめの気持ちをうったえている。

3　引き取り先の農家でひとりさみしく月に向かってほえる愛犬に、人生の悲しさやつらさを重ねている。

4　不本意ながらも犬を手放す決意をしたいきさつや心情をえがきながら、別れの余韻（よいん）を感じさせている。

4 次の各問いに答えなさい。

問1 次の各文の――線のカタカナを漢字で書きなさい。

1 アイデアを商品としてグゲン化した。
2 この絵はカイシンの作だと画家本人が言っている。
3 大阪万博にはオオゼイの訪日客が来るだろう。
4 本を売ったがニソクサンモンにしかならなかった。
5 会社にツカえて今年で三十年になる。

問2 漢字の多くは意味を表す部首と、音を表す音符（おんぷ）の組み合わせでできています。次の1～5にあげる三つの部首に、共通の音符を組み合わせると小学校で習う漢字が三つできます。それぞれ共通の音符を答えなさい。

（注1）共通の音符も小学校で習う漢字です。
（注2）部首名の後の【　】は音符の音読みを表します。
（注3）共通の音符の音が組み合わせてできる漢字の音になるとは限りません。

〈例〉ひへん／ごんべん／てへん　【ジ】［答え］寺　（できる漢字＝時／詩／持）

1 きへん／うかんむり／もんがまえ　【カク】
2 たへん／おおがい／まだれ　【チョウ】
3 そうにょう／いとへん／ごんべん　【コ・キ】
4 かたへん／きへん／しょくへん　【ハン】
5 あなかんむり／ちから／いとへん　【コウ・ク】